

農時電送

H30 水稻 No.④

概況

6月上旬の高温から、中旬は低温・“ヤマゼ”が続いたことから「黄化」症状が全域的に見られました。下旬は回復基調にあり、莖数が増えています。

(・・・低気圧の通過の影響など、まだ安定した状況には至っていません。)

今後は分けつ盛～幼穂形成期へと遷り、生育の転換期を迎えますので(その前後を踏まえ)適時・適切な管理に努めて下さい。

<今後の管理について・・・幼穂形成期に向けて>

◎幼穂形成期までの水管理・・・生育を進めて必要莖数の早期確保を。

- ・水温を高める水管理に努めましょう。
⇒入水は夜間～早朝、日中止水を徹底し、平均水温20℃程度を維持すること。
- ・土壌還元(ワキ)対策
⇒“ワキ”の発生と根の状態を確認しながら、水の入替えなど適切な水管理を行う。
- ・「中干し」は生育状況や天候の安定性を勘案しながら要否を判断。
⇒幼穂形成期前までの終了を基本に、「溝切り」と併用で速やかに実施を。

◎中期～後期除草剤の適期処理・・・残草は早急に対応を(幼形期前までに)。

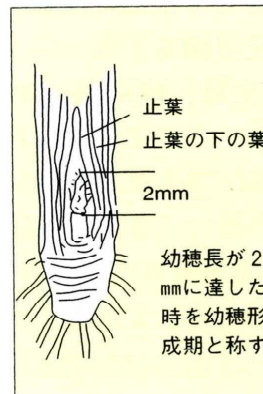
- ・落水を伴う薬剤など、それぞれの処理・散布方法を確認しながら適切な処理を行う。
(例:ワイドアタックSC、ヒエクリーンバサグラン粒剤、クンチャーバスメ液剤、クンチャーEW等)
- ・・・各JAの防除・除草剤使用ガイドを参照のこと!

【幼穂形成期の確認】

7月上旬には「幼穂形成期」に達するものと思われますので、品種やほ場別に確認して下さい。

平年の「幼穂形成期」は7月2日
(成苗:ななつぼし)

◎幼穂形成期=「前歴期間」へ突入!(深水管理スタート)
幼穂形成期後の約10日間を「前歴期間」と呼び、耐冷性強化に関わる水温の確保が重要、目標水温:25℃以上。



幼穂形成期の見分け方

生育中庸な株の主茎を根元から切り取り、その主稈の基部をカミソリで縦切りにする。幼穂の形成されている主稈基部は丸くなっている

◎置床(成苗等床土)の土壤診断実施と改善のすすめ

- ・育苗終了後は緑肥・えん麦播種などで床土培養に努めるとともに、行き過ぎた酸性化や磷酸過剰障害の恐れもありますので土壤診断実施し、必要な改善を行って下さい。(各JA窓口へ)
⇒ pH・ECの他、磷酸・石灰・苦土・加里も分析する。

☆農薬の安全使用と事故防止の徹底!